

# 碁鬼と仏とそして碁聖

北野寿田碁同好会会長 刀根正樹

菊の香る秋の夜、駅前の居酒屋で囲碁談義の花も咲く。T会長は元船乗り、陽気な色好みである。読書家で碁についても博学が四段止まり。H老人は80歳を超え非情な鬼の殺し屋にして六段。そして、私は平凡なサラリーマン人生で、碁も平凡万年初段である。

湯豆腐を肴に酒がまわる。今日の碁楽連例会で全敗した私に火山のマグマのような怒りがこみ上げた。『私は、鬼になります』とわめいた。周囲の客が驚く。『劔鬼宮本武蔵と化し、血の赤いバラを口にくわえ北野碁楽連を斬りまくる。返り血を浴び血笑する』『君には無理だし、棋風でもない。H老人の仕事だよ』と会長がニヤニヤ笑いながらたしなめた。『鬼を見たのです。恐ろしい鬼を、この目で見ました』

NHKの囲碁放送で趙治勲が、こちらを向き赤いハンカチを口にくわえていた。それが舌のように長くたれていた。目はつり上がり、ボサボサの頭をかきむしる。画面から目をそむけるような鬼気が放射した。対戦相手は武宮正樹。三連星の大模様を誇っていたが、趙の白石は大蛇のようにのたうち、黒石を粉碎した。『趙は、碁鬼というより碁聖というべきだろう。大三冠を二度取っている。当代無双の強さだった。碁鬼にはピンからキリまであるが、碁聖となると、世人が認める圧倒的な強さが必要だ。その上人格者、指導者でもある。』

安井算哲は陰陽道をきわめ、寛文十年お城碁で碁聖道策に挑戦した。算哲は第一手を天元に打ち鬼神を呼ぶ。対する道策は、目外しを連続三度打ち鬼を払う。中盤、白石を算哲が追ったが突如天元の一着が輝きを失い鬼影が消えた。白石は中原に脱出、白鳥のように飛び去った。鬼の力も道策には通じなかった。算哲は、生涯に一度も六歳年下の道策に勝てなかったという。

『会長も、催眠術的なまやかしをやりますね』『言葉で暗示をかける。心理学者によれ心理的に不安定になると、思考力が乱れポカをするという』『ワシの碁は、断じてまやかしではない』とH老人が憤然と反論した。目がつり上がり鬼の顔だ。『太平洋戦争では、北支那や沖縄で戦った。ワシの碁は、当時の闘争心、苦しみや悲しみを引きずっている。碁盤に向かえば勇猛で無慈悲な鬼になる。戦場に行けば、皆すさまじい鬼の顔

になる。戦死すれば、仏相になる』『碁盤の中に、鬼が住むのですか。仏は現れないのか』『日蓮上人は、仏の棋譜を残した。また、日海は寂光寺本因坊で仏道を修行し、信長や家康に認められ、第一世本因坊となった。仏道にかなった品格のある棋風が認められた。近世、碁は仏の心により築かれたといえる。戦国時代に、仏教が発展した。人は戦いを好む。しかし戦いながら、仏に救いを求める。碁を打ちながら、我々は戦い、そして仏に出会っている。』

T会長は、色坊主の顔になり、杯を重ねた。『現代の偉大な指導者にして碁聖。それは木谷實だ。内弟子を養成し、趙治勲をはじめ多くのトッププロを育てた。もう一人、瀬越憲作がいる。囲碁の国際的な普及、文化面での功績を残した。そしてワシの先生でもある』とH老人は目をめぐった。私は声をのんだ。『ワシは、憲作の本で開眼した。彼の手談で感銘を受けた。』

呉清源や橋本宇太郎や、韓国のチョフンヨンと同門だと信じる。晩年憲作は自殺した。遺書に、体の調子がとれない、とあった。『いずれ我々の行く道であろう』『いやいや、さにあらず』と会長は酒をすすめた。『憲作先生も、大戦で死んだ戦士も、ひめゆり隊の少女も皆天国の花園で幸せに楽しく暮らしておるさ』会長はかつて人生に挫折した。多摩御陵に参拝した折、天空に声を聞いたという。『戦争で死んだ若者に代わり、長く生きるがよい』古希となり、会長はようやく長い老後を天に生かされていることを実感し、天の存在を理解し、感謝した。『清酒の異称を、聖(ひじり)という。これを飲み我々は、碁聖となれる』徳利を傾けながら、会長もH老人も、そして私も大いに笑った。花の香がただよっていた。 **寒椿 碁鬼も 碁聖も 同じ枝**

(碁楽連だより 2008年11月23日208号)